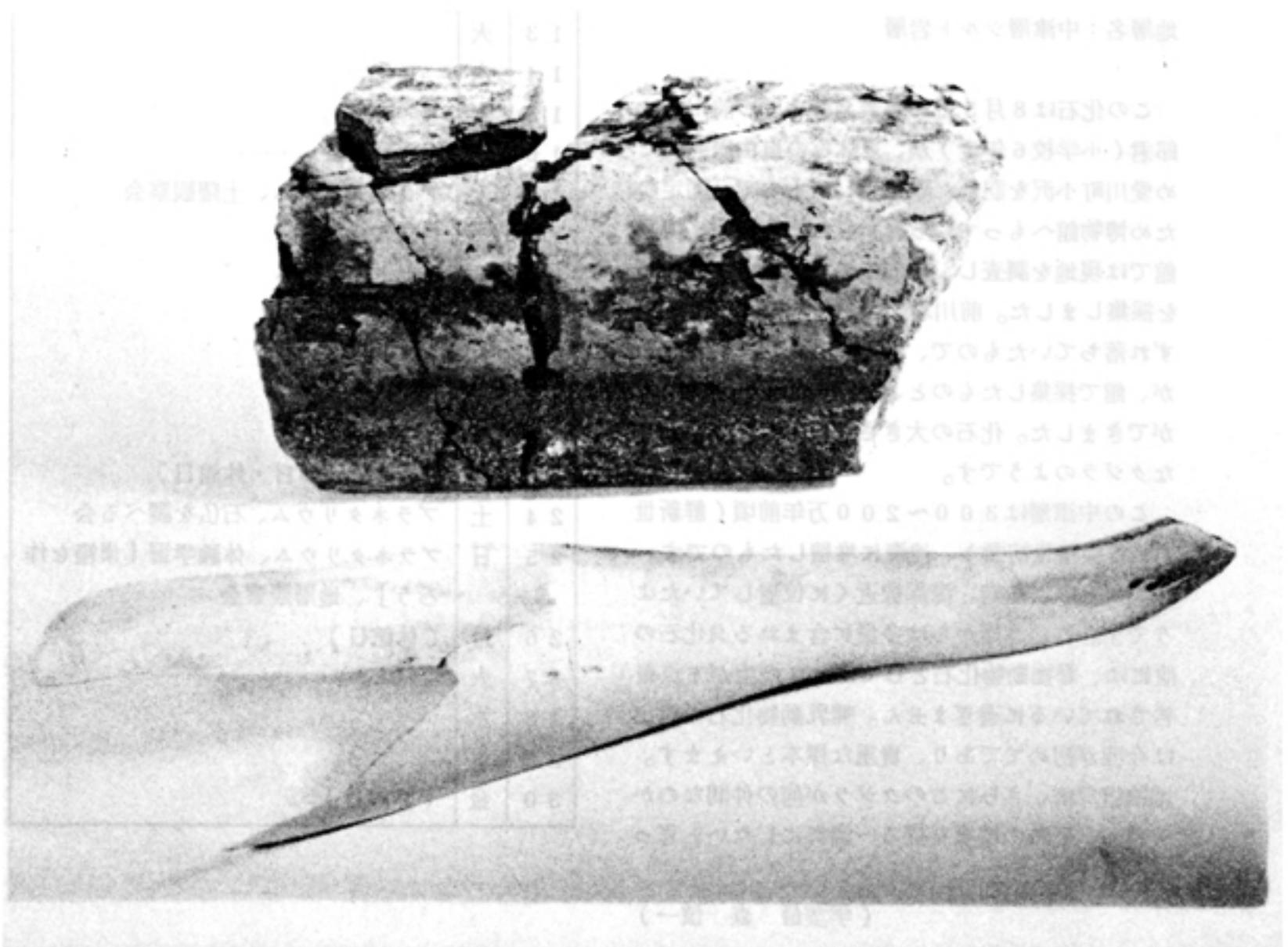


収蔵資料の紹介④

クジラ類の下顎化石



上が化石。下は現生のクジラの下あご部分の骨（長さ65cm）。

くわしくは次ページをごらん下さい。

収蔵資料の紹介④



クジラ類の下顎化石

産地：愛川町小沢

採集日：84年8月5日及び8月17日

地層名：中津層シルト岩層

この化石は8月5日に海老名市今里の前川真一郎君（小学校6年生）が、夏休みの自由研究のため愛川町小沢を訪れた際発見したもので、同定のため博物館へもってこられました。その後、博物館では現地を調査し、地層中に残っている骨化石を採集しました。前川君が採集したのは崖からくずれ落ちていたもので、数個にこわれていましたが、館で採集したものと、きれいに接合することができました。化石の大きさからみると相当大きなクジラのようなようです。

この中津層は300～200万年前頃（鮮新世末から洪積世初頭）、浅海に堆積したものです。小沢付近はこの時、海岸線近くに位置していたようです。この地層からは多量に含まれる貝化石の他には、脊椎動物化石としてはサメの歯が4点報告されているに過ぎません。哺乳動物化石の産出は今回が初めてであり、貴重な標本といえます。博物館では、さらにこのクジラが何の仲間なのかを調べ、当時の環境を探る一資料にしたいと思っています。

（学芸員 森 慎一）



1	木	
2	金	
3	土	（文化の日・休館日）
4	日	プラネタリウム
5	月	（休館日）
6	火	
7	水	
8	木	デッサン教室
9	金	デッサン教室
10	土	プラネタリウム、土曜観察会 石仏を調べる会
11	日	プラネタリウム、自然観察会
12	月	（休館日）
13	火	
14	水	
15	木	
16	金	星を見る会
17	土	プラネタリウム、土曜観察会 古文書講読会
18	日	プラネタリウム
19	月	（休館日）
20	火	
21	水	
22	木	
23	金	（勤労感謝の日・休館日）
24	土	プラネタリウム、石仏を調べる会
25	日	プラネタリウム、体験学習「巣箱を作ろう」、地層観察会
26	月	（休館日）
27	火	
28	水	
29	木	
30	金	（休館日）

☆☆行事案内☆☆

●体験学習

▶「巣箱を作ろう」

日時 11月25日(日)

場所 博物館科学教室および高麗山

申し込み 11月18日までに、往復はがきで博物館へ。多数の場合は抽選により20名までとします。

午前中、巣箱を作成し、午後、それを高麗山のスギ林にかけに行きます。昨年までにかけた巣箱のそうじも行います。

▶「おかざりを作ろう」

日時 12月16日(日) 10時～15時

場所 博物館科学教室

申し込み 往復はがきで、12月5日までに博物館へ。多数の場合は抽選により50名までとします。

正月に玄関などにつける「おかざり」を作しましょう。

▶「星座早見を作ろう」

日時 12月22日(土) 15時～18時

場所 博物館科学教室

申し込み 12月5日までに、往復はがきで博物館へ。多数の場合は抽選により30名までとします。

材料費 200円

星座早見盤を作り、そのあと実際に夜空の下で使い方を練習します。

●プラネタリウム「中国の星座」

むかし、中国には独自の星座の体系があり、それにもとづいたくわしい観測記録も残されています。中国の人たちは、星座を、どのように見ていたでしょう。

●星を見る会

寒くなりました。空も寒いかな？博物館の望遠鏡で、星たちを観察しましょう。

「秋の星雲・星団」

11月16日(金) 18時～20時

「月と金星を見よう」

12月25日(火) 17時～19時

参加自由。当日博物館科学教室においで下さい。

●土曜観察会「自然の新聞を作ろう」

11月10日(土) 相模川のカモ(四之宮)

11月17日(土) 秋の雑木林(大磯)

12月 8日(土) 新聞作り

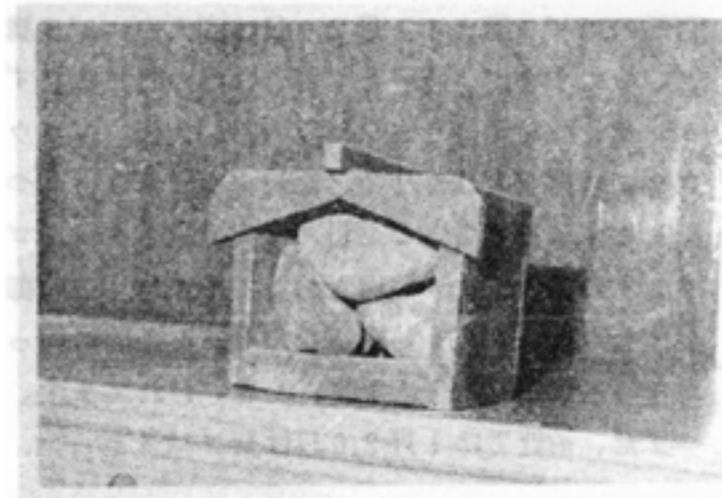
時間はいずれも14時～17時

申し込み 参加希望者には日程表をお送りします。60円切手を同封してお申し込み下さい。

●寄贈品コーナー

「いろいろなハチの巣」

今年は、スズメバチが多かったのか、ハチに刺されたという事故が、たびたび報道されていました。アシナガバチやスズメバチは巣を1年しか使いませんから、秋から冬に見られるのは空っぽの巣です。その巣を集めてみると、いろいろなことを知ることができます。今月の寄贈品コーナーはみなさんに寄贈していただいた巣を中心に、ハチの巣の見方を紹介します。(11月29日まで)



エビスの御神体(下島) (次ページ参照)

平塚の年中行事

11 エビス講

11月20日はエビス講の日で、近所の店でミカンをもらった経験のある人は多いと思います。古老たちの話によれば、この時のミカンはコウジミカンなどといい、すごく酢っぱいものだったといわれていますが、読者の方々の時はどうだったのでしょうか。また、商店でミカンをくれたのは昭和30年代まででしょうか。

さて、エビス講には商店ではミカンを配ったのですが、この行事自体は商家だけでなく、農家や漁師の家などでも行い、平塚周辺の伝承では3つ程の特色をあげることができます。1つはエビス講は11月20日(旧暦10月20日)だけでなく、1月20日にも行われていること。2つ目には、家の台所などに祀られるエビスは家の収入に関する神と考えられ、エビスは1月20日に稼ぎに出かけ、11月20日に家に帰ってくるといわれていること。そして3つ目には、1月20日は百姓のエビス講、11月20日は商人のエビス講と区別し、農家と商家・漁師の家などでは行事内容に差があることです。

たとえば市内神田地区の農家では、エビス講にはエビスの神像を座敷に出すか、七福神の掛軸をかけ、赤い御飯や魚などを供えます。エビスは1月に稼ぎに出て、11月に帰ってくるが、この神は普段は台所か居間などに祀ると、座敷の方に出たいと思って一生懸命働くので良いのだなどといわれています。北金目の農家では、1月20日は百姓のエビス講、11月20日は商人のエビス講といっていますが、両日とも行い、この日には必ずケンチン汁をつくりました。人参、大根、ゴボウ、コブ、豆腐を入れた汁で、赤飯やナマスなどもつくります。そして、この日には大神宮(ダイジゴサン)の棚の下に一斗枿をおいて中にエビスの御神体を入れ、トボ(斗棒)をのせ、この前に作った食物と魚(鯛など)を供えたといわれています。

また、須賀では1月20日は初エビスといい、

丁寧な家では朝、オザッキにご飯を盛ってエビスに供える程度ですが、11月20日のエビス講は盛大にしたとのこと。11月の時は、エビスの神像を1升枿に入れたりして座敷に出し、この前にお神酒、赤飯、煮物、ナマス、ミカン、魚を供えます。魚はなくてはならないもので、頭付きを2尾腹あわせに供え、家によっては現金をエビスの前に盛りあげて供えたりもしました。ところが須賀の漁師の家ではこれだけでなく、乗組員が網元や船主宅に集まり、エビスの前で供えてある物を、これは100万円、あれは500万円などと景気のいい値をつけて売り買いのまねをし、手を打ってお神酒を頂くとその後は宴会になったといえます。こうした宴会は漁師だけでなく、大工などの職人の家でも、親方の家へ弟子や関係者が集まり、商家では親戚の者を招いて盛大だったとのこと。

先にあげたエビス講の3つの特色は、神田地区、北金目、須賀の例からわかると思います。農家では家ごとにエビス講をするのに対し、漁師・職人商家では一緒に働く人たちや親戚の者が集まって祝っているわけです。こうした行事内容の違い、あるいは百姓のエビス講、商人のエビス講といった区別があることについては、一口にいえば、エビス講が初めは都市の商家などの間から起こり、それが次第に農家でも行われるようになったことによります。江戸時代、文化14年(1817)に幕府の右筆の屋代弘賢が全国各地に出した「風俗問状」の回答をみると、この当時、都市から農村にエビス講が広まりつつあったことがわかります。また、商店が配るミカンについては、江戸という大都市へのミカンの移入をみると17世紀初頭から大量に行われ始めており、江戸の商家から地方都市の商家へと広まっていったことが考えられます。

(学芸員 小川直之)

(前ページ写真参照)

(江戸のミカンの詳細は、塚本学「江戸のみかん—明るい近世像—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第4集所収、を参照ください。)